へざりしことは近年迄盲法師釜葎の徒が二季の土用に地神を祀りし經文が其經の一部なりしを以ても證せらる。故に金鼓の由來も遠く此邊に存在するものと見て搜索を試むべきなり。要するに長門其他の諸國の踊に鉦を叩くことは極めて重要な由緒あることは田樂のサ、ラとよく類似せり。

雜 錄

樺太島に於ける

先住民 (上)

B. Pilsudski 述

鳥 居 龍 藏 譯

左の一篇は B. Pilsudski 氏が一昨年十二月發行 Globus 雜誌第九十六卷二十七號に登載せられたる Die Uebewohner von Sachalin なるが、こは學問上尤も注意すべきものなれば、余は茲に其全文を譯することゝはなしたり、氏は曾て本邦に來られしことありて、余は其際東京西ヶ原貝塚に案内せり。

稀薄な樺太島の住民は、オロッケン (Orochen) ギラーケン (Gilenen) アイヌ (Ainu) の三種族から成つて居るが、孰も露國人や日本人が初めて此島に上陸した頃には、最う夙から住んで居つたのである。曾てこの島を巡回したロバチン (Lopachin) ポラコフ (Polakov) など云ふ最初の露國探險隊は、たゞ石器を製造する事を知つて居りながら、然も土器製造にも通じて居た一滅亡種族の明瞭なる痕跡を發見した。そしてアイヌの説に據ると、此の傳說的な種族はトンチ (Tonschi) と稱するのである。

さて土小舎 (Lehmhütten) の殘趾や、其附近で發見された、斧、箭、槍の頭のやうな打壞れた石器や、土器の破片や、粘土製の完全な器具や、貝殻や、各種の魚、哺乳動物の骨片等は、猶ほ充分なる學術的、考古學的研究及び鑑定を要するのである。

樺太島の先住民の起原は一の未解決の問題であるから、余は茲にアイヌ間に存して居る傳説と、余が親しく彼等の口から聞き取つた傳説とを引證したいと思ふ。

ギラーケンもオロッケンも此の島の富に引きつけられ

明治四十四年五月十日

て茲へやつて來たのだが、彼等の話によると、彼等が來たのは、アイヌよりも尙ほ最も後の事で、アイヌは其當時該島に於ける唯一の住民であつたさうだ。溪谷の中や、

山の斜面等に確かに人手で掘られたと見える溝が夥しく目に附くが、彼等は其れを其所に住んで居つた多毛のアイヌの工事であるとして居る。ギラーケンとは又此の穴を *Kuli rukku* 即ち「アイヌの穴」とか、*Kuli molf tat tulku* 即ち「古代アイヌ小舎の溝」などと呼んで居た。して大抵のギラーケンは此堅穴を彼等の先祖の住家の殘跡だと考へて居るらしい。オロッケンも亦此堅穴を *Kueai*

goropai nunda 即ち「アイヌの古い家」と稱へて居る。しかし余がトンチなる知識に關しては只ニシエン灣地方のギラーケンから聞いた許である、之は多分此の灣の南部にはギラーケンやアイヌが移住して居るから、接近して居る種族が彼の口碑を引き受けたのであらう。して此の附近の或ギラーケンが余に次のやうな傳説を話してくれた、即ちトンチは中央に山湖を抱いて居る山に住居た、彼等は非常に婦人の缺乏に苦しんで居たので、海岸

に住つて居るアイヌの女を盗み出した、スルト其が原因と成つて、兩種族の間に大戦争が始まり、遂にトンチ族は哀れや全滅して仕舞つたのであると。

各地で發見された土器の缺片に關して、ギラーケンは二種に云て居る、即ち多數の者は之はアイヌのだとして居る。又一方の者は、之はズツト昔にギラーケンの祖先が未だ日本や滿洲の鐵器を知らなかつた頃、自から粘土で造つたのであらうと主張して居るが、此方が眞らしく思はれる、そして石斧や其他の石器は落雷の際に天から降つて來たんだと信じて居る。

千九百〇五年、余がアムール河岸のニコラエブスクに到着した時、大陸に住んで居るギラーケンが自分等の仲間では此石器を *Lyt' tuch* 即ち「電光の斧」と呼んで居ると確言した。又アムール河流域の者共は掘り出される土器の缺片を支那の器具の遺物だとして居る。一體土溝は此地方でも稀有では無いから、之に關しては彼等は何等報ず可きものを知らないか、さも無くば此 *tulku* を彼等祖先の小舎の殘趾としか思つては居らぬ、して彼等の祖

先なるものは、其の時代には現今滿洲に残つて居るやうな、そんな大きな住家では無く、土小舎に甘んじて住んで居つたらしく思はれる。此堅穴に關して、余はニコラエヴスク附近に住つて居る或頭腦のあるギラーケンの口から一の特徴ある話を聞いたから、文句通りに翻譯して引證して見やう。

『大昔、此のアムールに露西亞人など、云ふ鬼が顯はれて、人民を殺して仕舞いました。彼等は大きな舟や、三本櫓の荷船でやつて來たので、淺瀬を渡る事が出来なかつた、ソコでギラーケンは水の淺い地方に逃げ出して行つて、其所に土小舎を造つて、冬からかけて暫く辛抱してやがて又再び大アムールの岸に舞ひ戻つて來た、そして皆彼の移住民を *Kings* (鬼) と呼んで居つた』と。其れと同時に余はニコラエヴスクで偶然三人のギラーケンに落合つたので、又此トンチの事を尋ねて見たが、何んでも *Tu* (ギラーケンの樺太島に對する呼稱) には *Touan* とやら云ふツングーセンやオロッケンに似た一種族が住んで居ると云ふ事を耳にした事があると答へた。トーチン

と云ふ語はオロッケン語にも似通ふて居るらしいが、此の種族が何處からやつて來たかと云ふ事は未だ知れて居ない。そして余も生憎二度此地方を訪はなかつたから、此の風説を充分に説明する事も、又他のギラーケンから此の所謂トーチンなるものに關する其以上充分な報告を受取る事も出来なかつたのである。

一體アイヌには *z* といふ子音は全く缺けて居る、他の關係ある言語に現はれて來る其子音にはいつも *c* を代用して居る、さればギラーケン語の *zyra* はアイヌ語では *oion* と發音され、露語の *zima cima* と發音される。して子音 *n* は言語に激しく交つて居る。

豊かに發見さるゝ堅穴や小舎の遺跡に關するアイヌの報告は餘り多様にも渡らず、矛盾も少ない方だ、彼等は石器や、土器の缺片を、嘗て此の島に住つて居たトンチのものだと爲て居る、實際又アイヌは自分等の古い穴や、土小舎とトンチの其れとを明かに區別をして居る。即ち後者の堅穴は前者の堅穴よりは深いが狭い。タラヤ海から程遠からぬ砂丘の上には數基米に渡つて堅穴がある

が、アイヌは之をトンチの住家だとして居る、余は此堅穴の二三を測量して見しに、深さが一米四分一、乃至、一米二分一、方形の入口の深さが四米四分一、乃至、五米といふ成績を得た。然るにアイヌの穴になると、深さは約一米を上る事は無いが、截面はトンチの其れより著しく大きいのである。

トンチの堅穴とアイヌの小舎の残趾とにも一つの相違は、後者には其後面に於て種々と大きさの違つた圓錐形の一個の穴が設けられて居ると云ふ點である。此の穴は所謂「toi simpu」即ち「土井」で、此所から土屋根の製造に要する土を取り出す。土人が同一の小舎に滞在する時期が長ければ、長い程其屋根は餘計に壊れる、かくなれば其修理の爲めに土は愈々多量に土井から掘り出される。

従つて穴は益々深くなるといふ譯である。土井によると深さが二米、そして周囲は最も廣い所が十七米半にも及ぶ事がある、尤も此土井なるものは、祖先から由來したのと云ふてアイヌが見せて呉れた凡ての小舎にあると云ふのでは無い。之に依て考て見ると、冬籠りの小舎で、

誰か家族の一人が死にても爲た場合には、早速そうして永久に其所を立ち退いたといふ事が説明される、若しこれが小舎が造られてから間もなく、例へば一年目位に起つたとすれば、廣大な堅穴にも一の土井の跡をも認められない譯となるのである、小舎建築の際、屋背の修理に要する、土は、小舎の下から掘り出されるから充分である。尤も大抵のトンチの堅穴の側にも之と同じやうな圓錐形の口が眼につくけれど、其の起原は全く別のものだ。數世紀前にはアイヌは此のトンチ小舎を利用して、一種特別な驚獵に使つて居つた。即ち此穴の中には一個の餌——其は大抵死犬の生肉であつた——を置き、さて上部の穴と側面の口とを除くの外は、穴の全部を全然藪で覆ふて仕舞ふ。其格恰は丁度天幕でも見るやうだ。而して、第一の口はおびき寄せられた驚の係蹄に入る入口となり、第二の口は、人が隠れて居る傍の天幕との交通用に供せらるゝのである。此人の爲めには、出來上つて居る小舎と一列に第二の堅穴が掘られてあつて、能く注意して粘土と草とで覆ふてある、一體、此の肉食鳥の尾羽

は箭羽として非常に珍重されたものであるから、樺太では以前驚獵は随分熱心に行はれたさうだ、従つて此の驚獵、殊に獲物を待伏する爲めに使用された土窪に關しては随分と種々な話が傳はつて居る。

アイヌはトンチの居る近所を嫌惡は爲なかつたが、彼等の古い堅穴には決して自分の土小舎を造らなかつた、一體アイヌはトンチを異人種視して居たから、彼等の殘趾を尊敬する責任があるとは思つて居なかつたが、自分等同志の遺蹟に對しては左様では無かつたのである。アイヌの家庭では家族の死屍を埋葬しないで、小舎の中に殘して置いて直ぐ其所を引越して仕舞ふといふ風が随分あつた、而して死人を墓地に葬つた場合でさへも、死人のあつた家を見棄てゝ仕舞ふのである、彼等はこんな小舎の近くに滞在する事を馬鹿に恐がつて居る。能くトンチの堅穴の周圍にアイヌの住家殘趾が見當るのは、斯くの如き理由からである。

余はトンチに關した質問をすると、屢々好い加減な答をされた事もある、嫌々に話された事もある單純といふ

よりも寧ろ詐かされたと思つた事もある。其所で余は色々工夫をこらして質問した末、漸くアイヌの老人等の口を開かせると、彼等は話し出した。即ち、祖先からトンチの事を聞いた事があるが、もう全く忘れて仕舞つたとか、トンチは大變アイヌに似て居たが、最早何所かへ失跡して、今は誰とて其行方を知る由も無いとか、トンチは石斧を使つて、土小舎に住んで居たが、アイヌを怖つて何處へか逃げて行つて仕舞つたとか、トンチは能く土小舎から出て來て、アイヌを眺めて居たが、アイヌが、漸々近寄つて來て彼等の隱家を吟味して見ると、こはそも如何に、彼等の姿はかき消す様に成つて仕舞つたなど——といふのである。スルト倒々二三人のアイヌが簡單に、然も確固と、トンチなるものは全く無いもので、此の近所には只アイヌのみが住んで居たのであると言ふた。

千九百〇四年の四月、余がアイヌと起居を共にしてから二年目の事、もう大分アイヌとは心安く交際する様になつた時、之も親友の一人で、私が能く世話をしてやつたタラヤ生れの青年が、トンチに關してアイヌが守つて居

明治四十四年五月十日

る秘密の真相を余に打ち明けて呉れた。即ち、樺太にはアイヌが來ない前から正しく人間が生息して居たのだが、萬一自分等は移住民であつて、先住民では無い事を露國人に感附かれるが最後、土地は盗み取られ、尙ほ此の尊い島をも追ひ出されるといふ憂目を見るやうに成りはしないかと思つて、斯くは戰々怖々として事實を秘密にしたり、否定したりして居たのである。そんな譯だから、アイヌの老人輩は彼等の先驅者に關する一切の詳細を頑固に否認したり、又其同種族全般に向つて、アイヌは此の地の先住民では無くて、嘗て北海道(蝦夷)から樺太に移住したのであるといふ事を一切口止めしたり爲たのである。此詳細は、東海岸の凡ての土人——ギラokenもオロokenも入れて——から相當の尊敬を拂はれて居るナエロ村の一老アイヌから之を確かにする事が出來た。彼は以前は故意に余を欺いたと白狀した、然し後に成つて、余がアイヌに對して好意を持つて居る事が解つたので、もう決して土人を悲境に陥らす様な事は毛頭無いと合點が行つたから、それで真相を話せた譯なのである。

余は何時頃からこんな禁制がアイヌ間に起つたかといふ事に關しては何等詳細なる報告を得なんだが、自分には其は明白に解つて居る。即ち、余は初めて露國人が此島に侵入した其時からであると言はう。カピテン、ネヴェルスキー(Kapitan Nevelski)と其幕僚は、日本人は餘り古くから此島に住んで居たのでは無いから、樺太に對しては何等の權力をも有しないといふ事を極力證明しやうとした。即ちもう夙うから此島には「露國臣民」即ちオロokenが住んで居たからと云ふのである。所が此オロokenを露國人は間違つて「Tungusen」と稱し、露國のウドスク地方から移住したものだとして居る。『樺太の領域を統治せんとする露國の動かす可からざる權利を確定し』又其實際引き起された住民吸收の時に表はれた、ある恰かも小兒の様な人種學的の傳説(一)の表示を爲すに至つた此の政治上の目的は、確しかに土着住民の心を寒からしめたものである、而して彼等は之無きも既に見知らぬ異人種の出現の爲めに大に刺戟されて居つたのである。尙ほ最も奥に進み入つて居つた日本人でさへも之の

爲めに腦ませられた、まだ根據を堅めない中に此の地から彼等は今は、之までの心配して避けて居た地方、即ち樺太のズット北の方を指して迅速に移住したので。一八五四年から一八七五年に至る間、樺太の南部が日露兩國主權の許にあつた時代は、アイヌ間に不信の念を起さしめ、又狡猾な外交術を表はした時である、而して終に露人が此の島の主人公となり、日本人は折角花が咲きかゝつた開拓地を見捨てなければならぬ様になつたので、子供の様な土人の心には、自分等も亦やがて其の存在を脅かされて、此父祖の地を後にするやうな事に成りは爲まいかと觀念が堅く根ざすに至つた譯である。又日本人だともアイヌを、新政府の過度な政策を以つて、思ひの儘に苦しませるのを看過する事は出来ぬ、されば彼の八百人のアイヌが日本人と手を携へて此島を去つたのは、假令彼等が黄色な隣人の留意や親切を別段喜んだと云ふ譯では無いにしろ、何等不思議な現象でもないのである。

(一)ネヴェルスキー氏著 Podwigi russkich morskich oficerov. (露國

海軍士官の事業) 一八七七年。ペテルブルク發行、三〇四及三〇五頁を見よ、此書はアイヌの熊祭及び其土小舎の記事を掲げて居るが、兩者共オローケンのものである事を書き添へてある。然し彼等は只ツンドラ地方に住し、特に馴鹿飼養を職業として居た。其中には又 Josenokkajun の報告をも引用して居るが、之は露國のツングーセンとアイヌより由來し、各所の村々に純粹なるアイヌと共に點々住んで居る、此報告は未だ何人も確言したものは無く、シュレンク氏 (Schrenck) の如きは眞向から誤謬であると書いて居る。余自身の研究と觀察とに依れば、是等凡てのものはネヴェルスキー氏にせよ、他の人々にせよ、皆其職務上樺太の海岸を巡回した際に發見されたのであると信ずるのである。

人類學講話 (承前)

華族人類學會にての講話に基く

坪井正五郎

アジヤ的人種南部

アジヤ的人種は其分布區域が廣く、

地理の上のみから見ても、互の間に移轉交通の行はれ易い南寄りの部分と、同じく互の間に移轉交通の行はれ易い北寄りの部分とに別かつ事が出来、且つ南の部分に居る者は南の部分に居る者同士、北の部分に居る者は北の